

江戸中期・諸国産物帳に記載されたイヌ属動物の名称

Japanese Names of the Animals Belonging to Genus *Canis* Described in "the Flora, Fauna and Crops of the Japan Islands" in the 18th Century

中村一恵¹⁾

Kazue NAKAMURA¹⁾

Key words: wolves and dogs, Japanese names, the middle Yedo Era

I. はじめに

日本列島のうち、本州・四国・九州の3本土に生息していたニホンオオカミ (*Canis lupus hodophilax* Temminck, 1839) は絶滅したと考えられ (日本哺乳類学会, 1997)、国内で数体の剥製標本と100個体に満たない頭骨等の骨格が発見されてきたにすぎない。それらの標本の発見地域には著しい偏向があつてニホンオオカミの分布復元までには至らなかった (中村, 2004)。しかしながら近年、盛永・安田 (1985~1995) および安田 (2003a~2003c) の多大な努力によって丹羽正伯の『享保元文諸国産物帳』の収集編纂がなされてきた。

これらに基づいて江戸時代中期におけるニホンオオカミの分布復元が実現した (安田, 1977; 1985; 1993)。本草学者・丹羽正伯 (1691-1756) の許に提出された諸国の『諸国産物帳』は全部でおそらく1000冊を超える大部のものであつただろうと考えられている (安田, 1995)。現在までに発見された『諸国産物帳』の数は本来の数量に遠く及ばないようである。しかし大藩のものも多く、面積的には日本列島全域の約4割をカバーし、また、これらは地理的に均等に分布している (安田, 1987) ことから、全国的な規模において江戸時代の同時期のオオカミを始めとするイヌ属の名称を通覧するには『諸国産物帳』に優るものはないと思われる。名称の解明は分布復元にも貢献できるものと思われる。

II. 資料と方法

盛永・安田 (1985~1995) および安田 (2003a; 2003b; 2003c) によって収集編纂された『享保元文諸国産物帳集』 (全21巻) を通覧し、そこに記されたイヌ属 (*Canis*) の名称に関する語彙を抽出し、本土域諸国と島嶼に分けて整理

した。とくにオオカミ (*Canis lupus*) に相当すると考えられる名称に注目した。イヌの品種について言及した文書が若干あつたが、本論ではとくに検討の対象とはしなかった。

III. 結果

結果を表1に示す。備考欄には当該『諸国産物帳』の巻号をローマ数字で示し、当該巻に補遺編がある場合はSとローマ数字を組合せて示した。

以下に、各種ごとに類別した名称を挙げる。括弧内の数字は表1の文書番号に対応する。明らかにイヌ (家犬) と判断できた名称はここでは省いた。

・オオカミまたはオオカメ: 狼 (No.1, 2, 4, 5, 7, 8, 10, 11, 12, 14, 15, 16, 17, 24, 26, 27, 28, 30, 32, 39, 40, 51, 55, 62, 65, 66, 67, 69, 70, 74, 76, 78, 82, 87)、大かめ (No.6, 11)、おふかめ (No.12, 15, 16, 17)、おほかみ (No.18, 19, 24, 31, 76, 85)、おふかみ (No.22)、ヲハカメ (No.62, 66)、ヲハカミ (No.66)、をうかみ (No.82)、ヲウカメ (No.87)。

・オオイヌ: おいぬ (No.6)、大犬 (No.9, 15)、大いぬ (No.11, 12, 13, 16)。

・ヤマイヌまたはヤマノイヌ: 山いぬ (No.6, 14, 15, 28, 30, 65)、やまいぬ (No.7, 31, 85, 88)、山犬 (No.20, 21, 74)、山のいぬ (No.27, 55, 56)、やまの犬 (No.36)、山の犬 (No.29, 32, 38, 40, 43, 45, 46, 48, 49, 51, 52)、ヤマイヌ (No.62, 70, 73, 78, 86, 87)、山狗 (No.89)。豺または豺 (No.11, 12, 13, 14, 15, 16, 62, 66, 86, 87)。

・カセキ (No.1, 2, 3)。

・ノイヌ: 野いぬ (No.23)、野犬 (No.25)。

本土域の『諸国産物帳』に記載されていたイヌ属の名称は以上のオオカミ、オオカメ、オオイヌ、オイヌ、ヤマイヌ、ヤマノイヌ、ノイヌ、カセキ、サトイヌ、イヌ、ヂイヌの10種であつた。オオカメまたはオオカミが最も多く43文書、うち34の文書で漢名「狼」が使われていた。次いで、ヤマ

¹⁾ 神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館員
横浜市中区野毛町 3-129
3-129 Noge-machi, Naka-ku, Yokohama 231-0064 Japan

表1 江戸期中期諸国産物帳に記載されたイヌ属の名称

表1 江戸期中期諸国産物帳に記載されたイヌ属の名称		材カ	材イ	ヤマイ	ヤマノイ	ノイ	材キ	材イ	イ	材イ	備考
陸奥											
1	(盛岡領)従公儀御尋之産物御領分中書上留帳(1735)	●	-	-	-	-	○	-	○	-	XVIII-S II
2	(盛岡領)御領分産物(1736)	●	-	-	-	-	○	-	○	-	XV
3	(盛岡領)御書上産物之内御不審物図(1737)	●	-	-	-	-	○	-	○	-	XV
4	(仙台領)刈田郡滑津村産物(1735)	●	-	-	-	-	-	-	○	-	VIII-S II
5	(仙台領)盤井郡山築館天狗田村産物書上帳(1735)	●	-	-	-	-	-	-	○	-	XVIII-S II
6	(三頼)田村郡三春秋田信濃守領地草木鳥獸諸色集書書	○	[○]	○	-	-	-	-	○	-	XV
出羽											
7	羽州荘内領産物帳(1735)	●	-	○	-	-	-	-	○	-	XV
8	米沢産物集(1737)	●	-	-	-	-	-	-	○	-	XV
越中											
9	(越中国立山芦峯寺)産物書上帳(1735)	-	○	-	-	-	-	-	-	-	XVIII-S II
10	郡方産物帳 新川郡(1735)	●	○	-	-	-	-	-	○	-	I
11	郡方産物帳 射水郡(1735)	●	○	-	-	-	-	-	○	-	I
12	郡方産物帳 砺波郡(1735)	●	○	-	-	-	-	○	-	-	I
加賀											
13	郡方産物帳 能美群(1735)	-	○	-	-	-	-	-	○	-	I
14	郡方産物帳 河北郡(1735)	●	○	-	-	-	-	○	-	-	I
15	郡方産物帳 石川郡(1735)	●	○	-	-	-	-	○	-	-	I
能登											
16	郡方産物帳 羽咋郡・鹿島郡(1735)	●	○	-	-	-	-	○	-	-	I
17	郡方産物帳 珠洲郡・鳳至郡(1735)	●	-	-	-	-	-	○	-	-	I
越前											
18	越前国之内御領知産物(1735)	○	-	-	-	-	-	-	○	-	I
19	越前国福井領産物(1735)	○	-	-	-	-	-	-	○	-	I
常陸											
20	(水戸領)御領内産物留(1736)	-	-	○	-	-	-	○	-	-	II
下野											
21	河内郡宇都宮領高谷林新田村産物書上ヶ帳(1735)	-	-	○	-	-	-	-	-	-	II
22	宇都宮御領岡本最寄捨老ヶ村産物書上ヶ帳(1736)	○	-	-	-	-	-	-	○	-	II
23	(羽牛田村最寄捨三ヶ村産物書上帳)(1736) 欠題	-	-	-	-	○	-	-	-	-	II
24	芳賀郡竹原村産物帳書上帳(1735)	●	-	-	-	○	-	-	-	-	II
25	丹羽正伯様より被迎出候品々書上帳(頼顯附)(1735)	-	-	-	-	○	-	○	-	-	II
下総											
26	下総国猿嶋郡下郷二捨三ヶ村産物覚(1735)	●	-	-	-	-	-	-	○	-	XVII-S I
伊豆											
27	伊豆国産物帳 君沢郡(1776)	●	-	-	○	-	-	-	○	-	III
28	伊豆国産物帳 田方郡(1776)	●	-	○	-	-	-	-	-	-	III
29	伊豆国産物帳 加茂郡(1776)	-	-	-	○	-	-	-	-	○	III
遠江											
30	遠江国懸河領産物帳(1736)	●	-	○	-	-	-	-	○	-	III
信濃											
31	信濃国伊奈郡・筑摩郡高遠領産物帳(1735)	○	-	○	-	-	-	○	-	-	III
32	信濃国筑摩郡之内産物	●	-	-	○	-	-	-	-	-	III
美濃											
33	美濃国之内産物 羽栗郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
34	美濃国之内産物 各務郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
35	美濃国之内産物 中嶋郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
36	美濃国之内産物 石津郡	-	-	-	-	○	-	-	-	-	IV
37	美濃国之内産物 安八郡	-	-	-	-	○	-	-	-	-	IV
38	美濃国之内産物 加茂郡	-	-	-	-	○	-	○	-	-	IV
39	美濃国之内産物 武儀郡	●	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
40	美濃国之内産物 不破郡	●	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
41	美濃国之内産物 多芸郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
42	美濃国之内産物 本巢郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
43	美濃国之内産物 大野郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
44	美濃国之内産物 中嶋郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
45	美濃国之内産物 丹波郡大山	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
46	美濃国之内産物 可児郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
47	美濃国之内産物 厚見郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
48	美濃国産物 方懸郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XVII-S I
49	美濃国産物 池田郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XVII-S I
50	美濃国産物 土岐郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XVII-S I
51	美濃国産物 恵那郡	●	-	-	-	○	-	-	-	-	XVII-S I
52	美濃国産物 山懸郡	-	-	-	○	-	-	-	○	-	XVII-S I
尾張											
53	尾張国産物 愛知郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
54	尾張国産物 知多郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
55	尾張国産物 春日井郡	●	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
56	尾張国産物 丹羽郡	-	-	-	○	-	-	-	○	-	IV
57	尾張国産物 葉栗郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
58	尾張国産物 中嶋郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
59	尾張国産物 南郡(知多)村別	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
60	尾陽産物志 海西郡	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV

表1 (続き) 江戸期中期諸国産物帳に記載されたイヌ属の名称

No.	諸国名	文書名 (成立年)	材カ	材イ	マイ	マノイ	ノイ	カキ	サイ	イ	イイ	備考
61	参河	参河国加茂郡寺部領産物	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
62	飛騨	飛州志(1829)	●	-	○	-	-	-	-	○	-	V
63	近江	近江国蒲生郡之内産物	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
64	摂津	摂津国武庫郡産物帳	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IV
65	紀伊	紀州産物帳(1735)	●	-	○	-	-	-	-	○	-	VI
66		紀州在田郡廣湯浅庄内産帳	●	-	○	-	-	-	-	○	-	VI
67	和泉	和泉物産(和泉国産物)	●	-	-	-	-	-	-	○	-	V
68	播磨	播磨国網干攝西郡産物帳	-	-	-	-	-	-	-	○	-	VI
69	備前・備中	備前国備中国之内領内産物絵図帳(1737)	●	-	-	-	-	-	-	○	-	VII
70	出雲	出雲国産物名疏	●	-	-	-	-	-	-	○	-	VII
71		出雲国産物帳	○	-	-	-	-	-	-	○	-	XX-SIII
72	備後・安芸	加茂郡下市村産物目録(1736)	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XVIII-SII
73	長門・周防	周防長門産物相互請無之分付立	-	-	○	-	-	-	-	-	-	VIII
74	周防	周防産物名寄	●	-	○	-	-	-	-	○	-	VIII
75		周防国都濃郡徳山領産物附立(1738)	-	-	-	-	-	-	-	○	-	IX
76		周防岩国吉川左京領内産物杆方言(1738)	●	-	○	-	-	-	-	○	-	IX
77		玖珂熊毛郡産物名寄之内余り物帳(1739)	○	-	-	-	-	-	-	○	-	X
78	長門	長門産物名寄	●	-	-	○	-	-	-	○	-	VIII
79		長門国之内毛利讃岐守領内産物覚(1738)	○	-	-	-	-	-	-	○	-	X
80		舟木産物名寄帳(1739)	-	-	-	-	-	-	-	○	-	X
81		濱崎産物名寄帳(1739)	-	-	-	-	-	-	-	○	-	X
82		先大津郡産物名寄之内余り物帳	●	-	-	-	-	-	-	○	-	X
83		毛利岩之丞領分長門国之内豊浦郡産物(1738)	-	-	-	-	-	-	-	○	-	X
84	伊予	[伊予国越智嶋]従御公儀御尋物品々(1735)	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XVIII-SII
85	筑前	筑前国産物帳(1736)	○	-	○	-	-	-	-	○	-	XII
86	豊後	豊後国之内熊本領産物帳(1735)	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XIII
87	肥後	肥後国之内熊本領産物帳(1735)	●	-	○	-	-	-	-	○	-	XIII
88		肥後国球麻郡米良産物帳	-	-	○	-	-	-	-	○	-	XIII
89	日向	日向国諸懸郡産物扣	○	-	○	-	-	-	-	○	-	XIV
- 島嶼 -												
90	佐渡	佐州産物志	-	-	-	-	-	-	-	○	-	III
	老岐	老岐国土産考	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XVIII
91	隠岐	隠岐国産物絵図	-	-	-	-	-	-	-	○	-	VII
92		隠岐国産物帳	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XXI-SIV
93	対馬	対州井田代産物記録	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XI
94		対馬国八郷別産物覚帳 佐須郷(1735)	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XI
95		対馬国八郷別産物覚帳 豊崎郷(1735)	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XI
96		対馬国八郷別産物覚帳 伊奈郷(1735)	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XI
97		対馬国八郷別産物覚帳 仁位郷(1735)	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XI
98		対馬国八郷別産物覚帳 三根郷	-	-	-	-	-	-	-	○	-	XI

○:記載あり, -:記載なし, ○のうち●は「狼」の漢名が使われている文書。
 [○]No.6「おいぬ」と記載。

イヌまたはヤマイヌの名称が多く認められ 34 文書に上った。その他、全文字が漢字で表記されていたのは「豺」(10 文書)、「大犬」(2 文書)、「山犬」(3 文書)、「山狗」(1 文書)、「野犬」(1 文書)の 5 例であった。オオイヌとカセキには漢名の記載はなかった。島嶼部(表 1, No.93 ~ 98)ではイヌのみでオオカミに関連した名称記載はなかった。

IV. 考察

1) オオイヌ(またはオオイヌ)とオオカメ(またはオオカミ)

陸奥国田村郡の文書(表 1. No.6)では「大かめ、山いぬ共おいぬ共申候」と言い換えている。したがって、一つの文書に使われている異なる名称は必ずしも異なるイヌ属の種を指していたわけではない。文書(表 1. No.16)には里犬、大いぬ、おほかめが連記されている。「おほかめ」には説明書きはないが、「里犬」は「毛色白或は赤ク或ハ黒ク或ハぶち」、「大いぬ(豺)」は毛色はいけ形ふとく口は大き奴ニ似る寄」の添え書きがあつて里犬と比較された「大いぬ」の大きさや毛色の違いが具体的に描写されている。「はいけ」は灰毛の意であろう。「奴ニ似る寄」は解釈できなかった。

オオイヌ(またはオオイヌ)の分布は陸奥、越中、加賀、能登に限られている。オオイヌという名称は 1 例(表 1. No.6)だけである。陸奥と越中の 2 文書(表 1.6, 11)では「大かめ」という名称が記載されている。このうちの文書(表 1.6)では先に述べたように「大かめ」に「山いぬ」と「おいぬ」の二つの名称が付記されている。「大かめ」は大・かめと分解され、体の小さい里犬と比較して「体の大きい犬」の意であろう。「かめ」はイヌ(犬)の古語である(与謝野, 1924)。

オオカメとイヌの体の大きさの違いが対比されて成立した符牒がある。長野県伊奈地域で山林労働を生業とした人々が材木の直径に用いた検尺の符牒に尺一寸をチンコロ、尺二寸をジイヌ(地犬)またはサトイヌ(里犬)、尺三寸をオオカメ(狼)と言うのがある。これらは「イヌ類」の大きさの順を追った造語とみられている(松山, 1961)。オオカメの「カメ」はイヌの意で「大きなイヌ」に解釈しないと、大きさ比較のための符牒は成立しない。チンコロについて松山は何も述べていないが、チンコロは長野県一帯に広く分布する幼犬の方言である(白井, 2001)。

オオカミはオオカメと同系の語と解釈される。音韻変化上、o と u、u と i、i と e とは変わりやすい(松岡, 1937)。転訛の点からみて kame から kami への変音は容易であったと考えるならば、オオカメ同様、「オオカミ」の本来の意味するところは「大きなイヌ」であったと解釈するのが自然であろう。

2) ヤマイヌとヤマノイヌ

大いぬ(No.11)、大いぬ(No.13)、山いぬ(No.14)、大犬(No.15)、大いぬ(No.16)、ヤマイヌ(No.62,86,88)には豺または豺の漢名が付記されている。「山(やま)」は動植物の名の上につけて、それが同種類または類似のものに比して野性のもの、あるいは山地に産するものであることを表す語(日本国語大辞典第二版編集委員会, 1972b)である。山犬または山ノ犬は明らかに「里ノ犬」と対比された「山地の野生のイヌ」である。伊豆国の文書(表 1. No.28)では「狼 山のいぬ共申候」と言い換えていることから、オ

オカミ(*Canis lupus*)の同物異名とする解釈が妥当である。ヤマイヌとヤマノイヌは諸国の文書ごとに重なりのあるものは一つもない(表 1. 参照)。同系の語であろう。

3) ノイヌ

下野国の文書 2 例のみである。「ノイヌ」にはそれぞれ「野いぬ」(表 1, No.23)、「野犬(ノイヌ)」(表 1, No.25)の字が当てられている。現代のヤケン(野犬)とまぎらわしい名称である。「野」は「動植物を表わす名詞の上について、そのものが野生であること、山野で自然に生長したものであることを表わす」(日本国語大辞典第二版編集委員会, 1972a)。国語大辞典の解釈に基づけば、ノイヌはヤマイヌと等置可能な名称と考えることもできる。しかしながら頭骨標本に基づく調査(小原・中村, 1992)によれば、江戸時代後期の丹沢・箱根地域には現在の中型日本犬と比較して、それより大型からやや小型までのイヌが野生状態で生息していたことが少数報告されている。また、大きな人口密集地であった江戸は、同時に野良犬の密集地であった(塚本, 1995)。だが、何をもって野生化したと言えるのかの問題に触れるならば、江戸時代中期のとくに山地帯や山間部に家犬がどの程度野生化した状態にあったのかを具体的に知る資料は少ないものと思われる。現段階では「ノイヌ」の実体は不明である。

4) イヌ

家犬類の名称にはまったく問題はない。サトイヌ、イヌ、ヂイヌはそれぞれ里犬、犬、地犬の漢名が当てられている。文字通りサトイヌは「里犬」であり、ヂイヌは「地犬」の意である。イヌ(犬)という呼称が圧倒的に多く、狗(イヌ)という漢名が当てられた文書は非常に少なかった。江戸時代中期には、イヌの飼育が全国的に普及していたと判断される。

5) カセキ

陸奥国盛岡領(南部)からの文書に記載があっただけで少なかった。文書(表 1, No.3)には絵図が添えられ、「深山獣狼の類ニテスコシ小也至テ希ナリ」の説明書きがある。この図からイヌ属の動物であることには誤りない。武藤(1977)の秋田マタギからの聞き取りによれば、秋田県仙北郡角館地域では「馬を襲ったのは、オオイヌすなわち真の狼で、墓を掘ったりしたものは「カセギ」という野犬(ヤケン)であった」という。この事から盛岡領南部の「カセキ」というのも「マタギ言葉」であった可能性が高い。漢字名の記載はない。家犬の野生化したものか、オオカミであったのかは『諸国産物帳』の図や記載からは判断できない。

V. おわりに

「おいぬ」という語が近代まで東北地方では広く使われてきた(藤原, 1994)にもかかわらず、『諸国産物帳』には「おいぬ」の語は 1 例(表 1, No.6)の記載しか見当らなかった。備中の学者・古川古松軒(1726-1807)が天明 8 年(1788)、幕府巡見使に随行して東北地方から北海道まで視察に行った時の紀行文が『東遊雑記』である。その文中で「すべて奥羽にては狼を「おいぬ」と称して、「おおかみ」といえば土人解せず」と記述している。「土人」とは土着の人の意である。

『享保元文産物帳』が成立した時代は中国から輸入された本草書などを基に、いわゆる本草学が隆盛をきわめた時

代である(安田, 2003)。中央の知識人ではない、文字なき人々の民俗分類の論理から言えば、「おいぬ」ばかりでなく、「やまいぬ」の意味するところもまた、単純にオオカミの同物異名というだけの問題ではない。常民が認識していた山に住むイヌに同類のけもの、すなわち「やまいぬ」の本来の意味とは何であったのか、宗教的・文化史的背景に関する議論を深めながら名称を検討してゆく必要がある。

VI. 謝辞

長岡郁生氏には拙稿をお読みいただいた的確なご指摘をいただいた。『享保元文諸国産物帳集成』編纂者の一人、安田 健博士は産物帳の引用を全面的にご快諾いただいた。

文献

- 藤原 仁, 1994. まぼろしのニホンオオカミ福島県の棲息記録 .235pp. 歴史春秋社, 会津若松市.
- 古川古松軒, 1788. 東遊雑記奥羽・松前巡見私記(大藤時彦解題 1964). 東洋文庫 27. 305pp. 平凡社, 東京.
- 松岡静雄, 1937. 新編日本古語辞典. 608pp. 刀江書院, 東京.
- 松山義雄, 1961. 山国の神と人. 231pp. 未来社, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1985. 享保元文諸国産物帳集成第 I 巻加賀・能登・越中・越前. 585pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1985. 享保元文諸国産物帳集成第 II 巻常陸・下野・武蔵・伊豆七島. 917pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1986. 享保元文諸国産物帳集成第 III 巻佐渡・信濃・伊豆・遠江. 1274pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1986. 享保元文諸国産物帳集成第 IV 巻参河・美濃・尾張. 1109pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1987. 享保元文諸国産物帳集成第 V 巻飛騨・近江・伊勢・伊賀・摂津・河内・和泉. 1063pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1987. 享保元文諸国産物帳集成第 VI 巻紀伊. 962pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1987. 享保元文諸国産物帳集成第 VII 巻隠岐・出雲・播磨・備前・備中. 1229pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1988. 享保元文諸国産物帳集成第 VIII 巻備後・安芸・長門・周防. 1208pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1989. 享保元文諸国産物帳集成第 九 巻筑前・筑後. 890pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1989. 享保元文諸国産物帳集成第 IX 巻周防(続). 1210pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1989. 享保元文諸国産物帳集成第 X 巻豊後・肥後. 706pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1990. 享保元文諸国産物帳集成第 X

- V 巻蝦夷・陸奥・出羽. 944pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1990. 享保元文諸国産物帳集成第 X VI 巻諸国. 834pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1991. 享保元文諸国産物帳集成第 九 巻対馬・肥前. 830pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1991. 享保元文諸国産物帳集成第 X 巻長門(続). 964pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1992. 享保元文諸国産物帳集成第 X VII 巻補遺編 I 常陸・下野・下総. 972pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1993. 享保元文諸国産物帳集成第 X VIII 巻補遺編 II 陸奥・越中・尾張. 566pp. 科学書院, 東京.
- 盛永俊太郎・安田 健(編), 1995. 享保元文諸国産物帳集成第 X IX 巻補遺編 III 類別索引・総合索引. 1077pp. 科学書院, 東京.
- 武藤鉄城, 1977. 秋田マタギ開書. 222pp. 慶友社, 東京.
- 中村一恵, 2004. ニホンオオカミの頭骨記録. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学)(33):91-96.
- 日本哺乳類学会編, 1997. レッドデータ日本の哺乳類. 279pp. 文一書房, 東京.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会, 1972a. 日本国語大辞典第二版第 10 巻. 1469pp. 小学館, 東京.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会, 1972b. 日本国語大辞典第二版第 13 巻. 1421pp. 小学館, 東京.
- 小原 巖・中村一恵, 1992. 南足柄市郷土資料館所蔵の、いわゆるヤマイヌ頭骨について. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (21):105-110.
- 塚本 学, 1995. 江戸時代人と動物. 328pp. 日本エディタースクール出版部, 東京.
- 白井祥平, 2001. 全国方言集収覧方言名検索大辞典甲信越編(下). pp.1655. 生物情報社. 長野県茅野市.
- 安田 健, 1985. 滅びゆく動物たち(「享保・元文諸国産物帳」)から. 週間朝日百科日本の歴史, 7:144-145.
- 安田 健, 1987. 江戸諸国産物帳丹羽正伯の人と仕事. 139pp. 晶文社, 東京.
- 安田 健, 1993. 享保・元文期の「産物帳」について. 山口県立博物館編「ふるさと山口江戸時代の動植物図」, pp.145-155.
- 安田 健, 2003c. 享保元文諸国産物帳解題. 安田 健(編)2003c. 享保元文諸国産物帳集成第 X IV 巻補遺編 III, pp.1051-1064. 科学書院, 東京.
- 安田 健(編), 2003a. 享保元文諸国産物帳集成第 X IV 巻薩摩・日向・大隅. 712pp. 科学書院, 東京.
- 安田 健(編), 2003a. 享保元文諸国産物帳集成第 X X 巻出雲. 1112pp. 科学書院, 東京.
- 安田 健(編), 2003c. 享保元文諸国産物帳集成第 X X I 巻(補遺編 IV)出雲(続)・隠岐. 1928pp. 科学書院, 東京.
- 与謝野 寛, 1924. 日本語原考(13). 明星第二次, 5:520-523.

摘 要

中村一恵, 2005. 江戸中期・諸国産物帳に記載されたイヌ属の名称. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (34):69-73. (Nakamura, K., 2005. Japanese Names of the Animals Belonging to Genus *Canis* Described in the Flora, "Fauna and Crops of the Japan Islands" in the 18th Century Edited by S. Morinaga and K. Yasuda. Bull. Kanagawa prefect. Mus. (Nat. Sci.), (34): 69-73.)

江戸時代中期に編纂された『享保・元文産物帳』に記載されたイヌ属の名称を整理した。その結果、イヌ属の名称としてオオカミ、オオカメ、オオイヌ、オイヌ、ヤマイヌ、ヤマノイヌ、カセキ、サトイヌ、イヌ、ヂイヌの 10 種が使用されていた。このうち現在名のオオカミ(*Canis lupus*)に該当すると判断された名称はオオカミ、オオカメ、オオイヌ、オイヌ、ヤマイヌ、ヤマノイヌの 6 種であった。これらの名称はオオカミ(*Canis lupus*)の同物異名である。漢名では「狼」の文字が全国的に使われていた。島嶼域を扱った『諸国産物帳』にはイヌのみで、上記のオオカミとその関連名称の記載はなかった。家畜種の名称はサトイヌ、イヌ、ヂイヌの 3 種で、イヌ(犬)という名称が最も多かった。カセキ、ノイヌの名称はきわめて少なく、その実体は明らかではなかった。